

令和4年度 戦争にまつわる体験談

「はじめて見た故郷日本」

大林 芙美さん (83歳)

はっきり覚えていないが、忘れたくても忘れられない、この年になっても頭にこびりついていることを書き記しておきたかった。

北満(中国東北部)の郷土チチハルで生まれた私は、「宮前在満国民学校」に入学したが、勉強するまでもなく、終戦となった。

間もなくしてロシア人(ソ連軍)土足で家に上って来た。私はまだ小さかったので逃れられたが、おとなたちは悲惨なものだったらしい。

それから引き上げ者となり、小さいながらランドセルに自分のいるものを詰め、屋根のない貨物列車に乗り何日もゆられた。途中トイレは列車が止まっている間にその下で用をたした。この車中、まともな食事をした覚えがない。

断片的に思い出すのは、暗いギシギシという二段ベッドの上、母も父も兄も姉も誰もいない、まわりには知らない人ばかり、何で一人なんだろうと思い、良く聞くと伝染病になっていたみたいだった。真暗な広い部屋に隔離された病人だけがまわりに寝ていた。親も誰もいない。その時、「支那人※」の子になるのだと思った。何もわからず隔離がとけて病院から出てきた時、父母兄姉みんな一行に遅れて待っていてくれた。その時は、夢のような気持だった。

再び貨物列車に乗り、動き出したと思ったら、「頭を下げ! 頭を出すな!」と叫ぶ声とともに、「ドーンドーン」と鉄砲の音がすると、列車は止った。すぐに列車を降り、母は弟をおんぶして6歳の私は必死でついていった。先の見えない荒原を何キロ歩いたことか。やがて港の貨物船が見えた。その後、息苦しい船底で何日過ごしたことか。ある時、船内にサイレンが鳴り、手を合わせるように言われた。幼いながらも誰かが亡くなったのだなあと思った。そんなことがあっても、もう歩かなくて済むんだという思いの方が勝っていた。

明方、「甲板に上れ」と言われ上に行くのと何と、緑の山々や段々畑、生れて初めてみる景色が眼前に広がっていた。幼いながらも、これが内地(日本のこと)かと思った。あの景色は今も脳裏に焼付いている。

※中国人の蔑称・差別語。原文を尊重しそのまま掲載しています。